



# 男は 痛い !

國友万裕

第30回

『七つの会議』

## 1. 人生は自転車の車輪のように

1月の下旬。その日は学生たちと昼飯を食べる約束をしていた。彼らと行くことになっていた食堂は、もう20年近く前に、あるその大学の卒業生の人から聞いたことがあった食堂である。その人は俺より少し年下なのだが、学生の頃そこでよく食べていたと話していた。俺は、一度行ってみたいと思いつつながら、なかなか行く機会がなかった。店の名称が「〇〇食堂」なので、ネズミでも走っているような汚い大衆食堂みたいなイメージもあったし、今はもっとオシャレな店がいっぱいあるから、そんなお店、今の学生が行くのかと思っていた。それにもうその人も今50代のはずだから、彼が学生の時と言ったら30年も前だ。とっくに閉店しているだろうと思っていた。ところが、最近、ある男子学生と休み時間に話をしていると、その食堂の名前が出たのだった。彼は体育系の子なのだが、彼のクラブの子たちはしばしば行くらしい。彼は俺によく懐いて来る子で、「唐揚げ定食がなんとも言えず美味しいですよ。今度、行きましょう」ということになったのだった。

行ってみると、思っていた通り、古いレトロなお店。汚くはないが、年季の入った椅子と店内である。おそらく満員になっても全部で20人くらいしか入りそうもない、小さなお店。やっているおじさんとおばさんはおそらくご夫婦なのだろうが、もう70歳は確実にやっている。俺はカロリーのことを考えて、唐揚げではなく、焼肉定食を注文したのだが、「僕の一切れ食べていいですよ」と唐揚げ定食の唐揚げを、その男の子が一切れくれた。確かに美味しい。独特の味だ。

この人たちは唐揚げをずっとあげていたのか。半世紀にもわたって…。映画『スモーク』で、ハーヴェイ・カイテルが演じるタバコ屋の男が、毎日同じ街角を同じ時間に写真に撮っているエピソードはあまりにも有名だ。同じことを繰り返しても、一度として全く同じ日は存在しない、毎日、1日1日は微妙に違ってくる。そんなことをしみじみ考えた。

FBを始めて、はや7年経っている。FBには「過去の思い出」というページがあって、過去の同じ日のことを振り返ることができる。最近、わかったことなのだが、行きつけの食堂で週替わりランチをやっている店があるのだが、毎年同じメニューを同じ時期に出している。老舗だから粗方1年の週替わりメニューはあらかじめ決まっているのだろう。かくいう俺も、毎年、大体同じところで食事をし、同じところで映画を見て、同じジムに通い、同じ病院に通う。そういう、同じところをぐるぐる回っていく生活がずっと続いているのだ。

しかし、着々と時間は経っているのだ。自転車の車輪が同じように回りながらも、前へ前へと進んでいくように、同じようなところを回っているように見えても、どこかへと向かって、人生は動いているのだ。

FBで昔の教え子や若い友人たちとつながっているのだが、彼らは、突然、「結婚しました」「子供ができました」という記事を投稿する。20代から30代にかけては、結婚したり、子供を作ったりする人が多いのは、当たり前と言えば、当たり前のことだ。驚くようなことではないのだが、俺は何やら胸が痛いような複雑な思いになる。

俺は元々、結婚したいとも子供作りたいと

も思っていないので、別に結婚や出産自体が羨ましいとは思わない。羨ましいのは自分のジェンダーを素直に受け入れられる彼らの思いなのである。結婚したら、相手と姓が同じになる。子供ができたら、男は扶養者の役目を果たさざるを得なくなる。俺だったら絶対にしたくないことを彼らは喜んで受け入れようとする。

おそらく彼らは、「幸せの絵」みたいなものを持っている。パートナーや子供のいる家庭が幸せなのだというイメージを持っている。家族の幸せをプライオリティにして人生を生きていこうと思っている。そういう家族幻想を若い彼らは内面化している。結果的にうまくいなくなる人はたくさんいるのだけど、若気の至りで、後先のことは考えない。だからこそ、結婚や子育てのような一大事に飛び込んでいけるのだ。俺は、そういう幻想を最初から持つことすらできなかった。いや、正確に言えば、小学校くらいまではそういう幻想も抱いていた。しかし、中学から本格的にジェンダー強迫症となり、潮流とはかけ離れた人生を歩むことになった俺は、人生の早い時期にそういう幻想を抱くこともなくなってしまっていた。そこに俺は自分の孤独を感じるのであった。

## 2. 衰えていく体

去年の秋のある日、その日は仕事だったが、ずっと朝からお腹が痛くて、どうしようもなかった。俺はしばらく便秘気味で便秘薬を飲み過ぎたのが原因なのだろうが、それにしても痛い。水分をたくさん補給しながら、どうにか仕事をこなした後、夜はついに近所

の診療所に行った。そこでレントゲンを何枚かとった。「お腹にたくさん、ガスと便が溜まっています。それで痛いんだと思いますし、これが出れば大丈夫です」と先生に言われ、浣腸を3本ほどもらった。そして、家に帰った後、トイレで頑張ってみた。すると痛みがさらにひどくなり、もう居ても立っても居られない痛みとなった。仕方がないから救急車を呼んだ。前に救急車を呼んだのは30歳の時。もう四半世紀近く前だ。あの時は深夜に鼻の呼吸が苦しくなり、近くの総合病院に運んでもらったのだが、その時の医者というのがヤクザさんかと思うような人で、「このくらいのことじゃ、死なんから。眠れないんだったら、起きときゃええんや」という暴言を吐かれた。看護師さんたちも、「今、人の命を救っているところなんだから忙しいんです」と迷惑そうな様子だった。「所詮、病院なんて」と思ったものだ。しかも、病院に運ばれる救急車がうちの近所にやってきたとき、周りに近所の人たちが集まってきて、笑ってみていた。25年前はそんなものだったのだ。あれこれ社会全体が礼儀正しく、親切になっていったのはその後である。

今回は、救急隊の人がやってくると「ご主人ですか。どういう状況ですか」と一人の人に聞かれ、救急車の中に横たわるともう一人の人から「お兄さん、痛みはどのようなものですか」と訊かれた。俺は激しい痛みにもがきながら、「ご主人」とか「お兄さん」と言われることにおかしくなってしまうていた。俺は「ご主人」じゃないし、「お兄さん」という年でもない。とりわけ、「ご主人」という言い方は、ジェンダーの世界では禁句だから、普段ほとんど使ったこともない言葉だ。やはり、

俺は普通の人とは違っているのか。

その後、病院に運ばれたのだが、痛みがひどいのに相当の時間待たされる。やっと処置室に入って、鼠径ヘルニアだということはすぐにわかり、下半身を脱がされ、若い男の先生二人が一生懸命、脱腸を押し込もうとしていた。しかし、なかなかうまく入らない。

「痛い、痛い、痛い」と俺はあられもない姿で、もがいていた。女性の先生もヘルプに来たが、うまくいかない。しばらく経って、ベテランの男の先生がやってきて、さすが年の功で、一瞬にして押し込んでくれた。

「とりあえず、今日1日は入院してください」と言われ、俺は着の身着のままのままと泊まることになった。それにしても、女性も含めた人たちの前で睾丸をむき出しにさせられ、その近くを触られるというのは普通では考えられないことである。しかし、病院の人たちはそれが日常だから、事務的にやってのける。医者は収入も多いし、憧れる人が多いのだろうけど、あまり気持ちのいい職業じゃないだろうなあ。「俺は医者にならなくてよかった」とどうでもいいことを思うのだった。

とりあえず、一泊することになり、久々の入院だった。朝起きるとまずは大学に電話をかけて休講を伝えた。Facebookにも写真をアップしたので、色々な人から「大丈夫ですか」というメッセージが入った。大丈夫だった。一応、はみ出した腸が元におさまったので、痛みは一気に引いた。しかし、病院の先生の話では早くに手術したほうがいいとのこと。なんとなく気が重かった。俺は前に一度全身麻酔を経験しているが、あれは一瞬にして意識がなくなるので、やはり怖い。他の人たち

に尋ねたところ、ヘルニアぐらいは部分麻酔でできるらしい。歳を取ってくると腸のところが緩んできて、また同じことが起きる可能性があるから、すぐにしなくてはならないということはないけど、時間のある時にでも手術しておいたらと言われた。やはり、俺はもう歳なのだった。

思えば、五十肩はずっと治っていない。10年前までは得意だったバタフライが今はできないのだ。腕が痛くて上がらないのである。一時治りかけたのだが、また調子が悪くなった。鍼を打ちに鍼灸院に通うようになったが、まだ今のところ完治はしていない。

さらに、今年の1月の終わり、仕事が終わって、6時半過ぎに雨の中をバス停に急ごうとして、俺は滑って転んでしまった。右に傘を持っていたため、傘は大破、メガネにはヒビがはいて、フレームが曲がってしまった。俺はその足で眼鏡屋に行き、新しいものを注文したが、遠近両用眼鏡なので1週間くらいかかる。間に合わせに、安物をスペアとして買うことになった。気がつくやうに、羽織っていたコートも破れている。これも早速買い替え。さらにその後、ズボンも穴が空いてしまったため、買い換えることになった。左の顔と手と膝を打撲したようだった。頭を強く打ったため、起き上がった後も一瞬目眩がした。

翌朝、起きてみると左頬にコブができていた。さらにその翌日になると、こぶが充血に変わっていた。歳をとると、2日くらい経ってから後遺症が出てくるのだ。俺は、せっかちで仕事場にも早くに到着する。おかげで遅刻したことは一度もないが、家を出る時間が早いので、待ち時間が長い、時間を無駄にしているのかもしれないと思っていた。もっと電

車やバスの到着時間に合わせて生活した方が合理的かと思っていた。しかし、このことがあったことで、やはり元のスローライフで生きていったほうがいいのだと考えを戻した。遅刻するからと、バスや電車にダッシュしたりする歳ではないのだ。

### 3. 死んでいく命・生まれてくる命

今、俺の周りは生と死が渦巻いている。先日、俺と同年で突然亡くなった先生がいることがわかった。また、ある外国人の先生が70歳過ぎで亡くなったことを聞いた。つい先日まで仕事をなさっていて、顔も見ていたので、突然だった。40代くらいまでは、まだ死ぬ人は少ない。しかし、50代になると徐々に死ぬ人が増えていく。俺もヘルニアの時、転んで怪我をした時、あまりの痛みで一瞬死を意識したりもした。これくらいのことで死ぬことはないだろうとはわかっていても、歳をとって痛みを抵抗するエネルギーが弱ってきていることを感じずにはいられなかった。

その一方で、去年の暮れ、かつての教え子から女の子が生まれたという連絡が入った。「良かったね。12月の末に生まれると親孝行だという話聞いたことあるよ。ほとんど来年なわけだけど、今年の税金を安くしてくれるからね。今もそうなのかはわからないけど…12月31日生まれの娘のいる先生がそう言っていたよ」と俺は彼にメッセージした。俺のところに毎週やってくるマッサージの人にも6月子供が生まれる予定で、男の子だということもわかったみたいだ。「良かったよねー。ちょうど年号が変わる頃に生まれるし、年齢の計算もしやすいしね笑」。俺は彼らがお父さん

になっていくのを祝福しつつも、子供を育てるなんて大変だろうという気持ちが湧いてきて、羨ましいという気持ちにはならないのだった。

これから先の 10 年間はおそらく俺の周りで死が渦巻く 10 年間となるだろう。母ももう 80 だし、まだまだ元気だから 90 過ぎるまで生きるとは思うが、おじさんやおばさんたち、そして、かつて親しかった年上の先生たちなどが次々に死んでいくことになるに違いない。その一方で、かつての教え子たちは、結婚し、子供ができ、家庭を作っていく。生と死のドラマが巡り巡っていく。そのことに対する覚悟を決めなくてはならない。

知っている人が一人、また一人と死んでいき、新たな命がその穴を埋めるように誕生していく。これからの俺の人生は、そういうドラマの渦に身を置きながら、自らの余生と死を考えることになるのだろう。

俺は子供がいらないから、俺の遺伝子は淘汰される。男が女よりも浮気するのは、自分の遺伝子をばら撒きたいからだという話を聞いたことがある。女は、(双子や三つ子の場合もあるが) 普通は 1 回に 1 人しか自分の子を産めないから、何人もの男と関係を持っても、自分の遺伝子が増えるわけじゃない、だから、男ほど浮気をしない。だけど、男は一変に何人もの女に孕ませることができる。男も女も自分の遺伝子を残したいという原初的な欲求があり、それがセックスをする一因なのである。

しかし、俺はその原初的な欲求を果たすことはできないし、果たしたいとも思わなかった。俺の遺伝子なんて残したくない。こんな悲しい思いをする子を世の中に生み出したく

ない。こんな考えしかできない俺は、なんと不幸！ 悲しい男なのだろう。

#### 4. なぜ、男は女を追うの？

とはいうものの、ここまで徹底して女性と付き合わないで生きて来たことは、ある意味で勲章だろう。世の中はまだまだ恋愛至上主義である。俺みたいなやつは不幸、惨めである、と決めつけてかかっている。恋愛なんてしないならしないでも生きていける。前にある本で読んだことがある。男性は自分の感情のはけ口を女性に代替させることで解消しているのだと…。

もう 10 年近く前のことになるのだが、当時同じグループにいた男性から、食事でもしませんかと誘われた。仕事で嫌な部署に配属されることになって、落ち込んでいるから誰かと話したいと言うのだ。俺は、彼が俺に悩みを聞いてほしいと思っているのだと思い、食事に行ってみると、そうではなかった。彼は自分の悩みは話そうとはせず、俺の話の聞き手とするのだ。俺はぐちぐちボヤクタイプなので、俺の排泄行為を見て、自分も排泄した気分になる。そのカタルシスが心地いいらしいのだ。男子校だと女性的な男の子はモテると聞いたことがあるが、その心理にも繋がるのかもしれない。恋人や妻のいる男性は、女性たちの愚痴や悪口を聞いて、自分も排泄した気分になるのだろう。だから、みんな結婚しようとするのか。いや、男が結婚するのはセックスをしたいからだと言う人もいる、しかし、それは違っているだろう。昔みたいに結婚するまでは純潔を守るという世の中ではない。セックスが目的なのであれば、独身の

方がいくらでも色々な女性と自由に付き合うことができるのだ。

潮流から外れている俺はあれこれ思いを巡らすのだが、普通の人とはそこまでは考えていない。まあ、そろそろ周りも結婚するから俺も結婚するか。子供ができちゃったし、結婚するか。そういうノリなのである。結婚や恋愛に対して懐疑的になったことがないため、深く考えもせずに女と関係を結ぶ。性欲で理性を失ってしまう。そんなものなのだろう。

だけど、俺はそれができないのだ。何人も女性からトラウマを負わされるにつれて、俺はいつの間にか女性を生身の存在としてではなく、厄介な存在として見るようになってしまっている。その気持ちを解消するために俺は色々な人たちにそのトラウマをぶつけてきた。しかし、理解してくれる人は極めて少ない。カウンセリング、男性運動、NPO、どこに行っても、俺の気持ちを理解してくれる人はほとんどいない。理解してもらいたいと思うから、余計に怒りは募っていく。理解してくれなくて構わないと割り切るのが俺にとっての一番の得策なのだ。人間なんて所詮は孤独なんだ。他人に理解してもらおうとする俺が悪いんだ。聖職者の中にはずっと純潔を貫く人もいる。キリストだって、パウロだって、生涯独身だったのだ。俺は、女性と付き合えない自分を、付き合わなくても大丈夫だと思って、誇りにしていいかもしれないのである。

## 5. 俺は男なのか？

これと関連して言えることなのだが、俺は本当に男なのかと時々不思議に思うのだ。俺

は自分が男か女かわからないのだ。俺は女性よりも男性の方が楽しく付き合えるし、俺はゲイなのかもしれない。しかし、俺は、男の人の厚い胸板や腹筋を見て憧れることはあるのだが、ペニスを見たいと思うことはないのである。仲のいい男の人と男同士で風呂に入るのは好きだが、アナルセックスは怖くてできないし、したいとも思わない。思春期の男の子はペニスのサイズで悩んでいる子が多いと聞くが、俺はペニスのサイズなんて気にしたこともない。そんなので男の値打ちが決まると思っているというのがそもそも理解できない。

俺が大学の頃、クラスメートの男子2人が下宿に遊びに来た。彼らが俺の部屋を見てもらった言葉は、「男の匂いがする」ということだった。俺はその時、散らかしていたわけではなく、彼らが来ることは前もって分かっていたので、きちっと掃除をしていた。俺の部屋はヌードポスターやスポーツ用具などのような男性的なものは置かれていない。部屋の色使いも女性的だと思う。だから、彼らの反応は意外だった。2人とも自宅生で、お母さんや妹と暮らしているため、男しか住んでいない、女性の匂いを全く感じない部屋に対して新鮮な驚きを感じているようだった。2人とも異口同音に同じ感想を漏らした。やはり俺は男なのだ。しかし、大手を振って、「俺は男だ！」と言える確証がないのだ。俺は子供の頃からジェンダーに悩んでいるから、常に自分の性のアイデンティティを受け入れられずにきているため、普通の人なら考えもしないようなことで、自分は男じゃないという意識を持ってしまっている。

おそらく、ジェンダーやセクシュアリティ

のことはできる限り考えないのが一番いいの  
だろう。事実、普通の人はいくらまで考えない  
から性のアイデンティティを受け入れている。  
もちろん、ジェンダーは俺の研究分野だけ  
けれど、俺の場合は映画や文学で描かれるジェ  
ンダー表象の研究だから、ある程度距離を置  
いて考えればいいのだ。そうしなければ、いつ  
までもジェンダーパニック人間のままだ  
のである。

普段親しくしている牧師さんがおっしゃっ  
ていた。キリスト教でも上からかぶせよう  
とする人と下から押し上げようとする人が  
いる。原理主義者で聖書のルールを字義ど  
おり守らせようとする人と解釈を敷衍させ  
て多くの人を信者に押し上げていこうとす  
る人。その牧師さんはリベラル派なので、  
当然後者となる。おそらくジェンダーも  
これと同じだ。俺は男らしさの解釈を広  
げる、そのことで多くの男たちに自己肯  
定感を与え、男のルールにはまらないと  
ころがあっても、男として承認すること  
がこれからは求められているはず  
なのである。

俺の人生、これからどうなるのか。占星術  
によると人間の人生は生まれた時から円を  
描いていき、72歳がその人生のライフサイ  
クルの円が完結するらしい。そういえば、  
その中間地点となる、すなわち、半円形  
を描いた36歳くらいの時は、波乱万丈だ  
った。しかし、そこで、サイクルの半分が  
終わったのだ。その後の36年間では最初  
の36年間で学んだものから収穫を得て、  
ライフサイクルは完成するのである。72  
歳まで、後17年。その時までには全  
ての事柄を経験し、人生を完成させよう。  
自分の中の混乱を鎮めよう。そしてあと  
は余生として安らかに生きていこう。

先日、元教え子の女子二人と食事した。  
たらふく料理を食べた後、喫茶店でしば  
らく話をするようになった。二人ともア  
クティブなタイプの子で、食べるのも  
よく食べる。女の子だからというジェ  
ンダーには囚われていない。何よりも  
感心したのは、彼女たちは仕事をず  
っと続けたいと思っているということ  
だった。若い女の子だとまだまだ「早  
くに結婚したい、家庭に入りたい」と  
言っている子の方がマジョリティ  
である。それは彼女たちも認めてい  
る。「でも、家にいたんじゃ退屈だ  
ろうし、男の人に養ってもらって  
いて、お給料が少ないとか文句を  
言うってことはできないですもの」。  
「旦那がリストラになった時に、  
働いてなかったら大変なことにな  
っちゃうし」など、彼女たちの考  
え方は極めてしっかりしていて、  
男に経済的に頼ろうなんていう  
気持ちは全くないみたいだった。  
こういう子たちもいるんだから、  
女性に対する偏見は消さなくては  
ならない。まだ彼女たち  
のような子は少数派であるに  
しても…。

## 6. 『七つの会議』(福澤克雄監督)

池井戸潤原作の企業の腐敗を描く映画  
である。それなりに楽しめる映画だが、  
男性ジェンダー研究の俺には不快な  
面もあった。

野村萬斎主演で、最初が一番悪っぽ  
く見える彼が実際にはヒーローだ  
ったという話だ。悪く見える男が  
いい奴だったという筋立ては、  
本当によくあるパターン。男は  
ある程度は悪の要素がないと魅  
力的には映らないのである。  
なかなかこの常套的なステレ  
オタイプは崩そうにも崩せない。

また、何よりも、大企業で働く男  
というの

は、相手の腹を探り合って、本音と建前を使い分けて、好きでもない仕事の世界で上昇していくしか人生の選択肢がないのかと悲しくなるのだった。オールスターキャストで、様々な有名俳優たちが企業戦士として生きる男を演じていて、「男は敷居を跨げば七人の敵あり」という言葉を思い出した。

少なくとも俺は、こういう世界には生きていないから、その点は幸せだと思った。そして、55歳になった今、おそらく、これから先、今更そういう世界に入ることもないだろうと安堵もした。これから先、仮に第三次世界大戦が起きたとしても、俺はもう徴兵されるということはない。もう、この年なのだから。

そう思いながらも、男性ジェンダーを背負って生きている他の男性たちが不憫で、悲しくなっていくのだった。男は悲しい。また澁澤龍彦の本を思い出した。『幸せは永遠に女だけのものだ』…。